



台北での台湾式シャンプー（筆者）

## 世界の床屋事情(1)

愛知県がんセンター中央病院  
副院長／薬物療法部部长／外来化学療法センター長  
**室 圭**

### はじめての体験

恐らくはじめての訪問は、チャイナタウンにある、お世辞にも綺麗とは言いがたい理髪店だったと記憶している。国家試験を終え、いわゆる卒業旅行として、同じ仙台の大学で硬式庭球部の仲間であった友人たちと一緒に、サンフランシスコ、ニューヨーク、そして、部活の共通の先輩が当時在住されていたボストンを巡った。4月からは研修医として多忙を極める日々が待っている、今はとにかく最後かもしれないとつともなく自由な時間をじっくり楽しみたい、そんな時期であった。ただ、まだ国家試験の結果がわからず（当時は6月に合否の結果が発表されていたように臆気ながら記憶している）、心もとない不安感がいっぱいのも時期でもあった。そんな、自分にとってはじめての海外旅行での訪問が最初の経験であった。

特に目的があったわけでもない。ちょうど髪も伸びてきたし、どれ床屋にでも行くか、そんな感じで気負いも何もなかった。4月からの勤務や国家試験の結果が気掛かりで、周期的にとよんとした重い気分が襲わ

れるものの、西海岸特有のカラッとした気候のなか、開放的な気分にもなっていた。そんなサンフランシスコの地で、友人とは別れて一人で行動していた。華僑の街としては世界一の規模を誇るといわれていたチャイナタウンをぶらぶら歩いているときに、こぢんまりとした床屋が目に入った。辺り一面は、今アメリカ合衆国に居るとはとても思えないような高音の騒がしい中国語が飛び交い、チャイナタウン独特の喧噪と殺伐とした雰囲気や漂う街中の小汚い床屋に、なぜだかわからないが吸い込まれるように入ってしまった。散髪をお願いする際にどのように説明すれば良いかわからず、一抹の不安を感じながらも、生来、根拠のない度胸だけはあったので、いつものように深く考えることなく飛び込んでみたのである。

床屋の主人は、やや黄色に変色した白シャツ下着姿の禿げ親父で、英語ではなく中国語で語りかけてきた。英語はおろか中国語などまったく理解できない自分にとって、いきなり面食らったが、仕方ないと覚悟を決めて、髪を切ってくれとジェスチャーで示した。主人自身もコミュニケ

ーションを取ることを断念したのか、その椅子にかけて、と無言のままジェスチャーで示してくれた。そして、無言のままおもむろに髪を切り始めたのである。まあ調髪以外の目的で床屋に入ることもないだろうから、何も話さなくても何とかなるものである。床屋の中は理容師（というより汚いラーメン屋の店員風であった）も客も中国人ばかりで、中国語があちこちで盛んに飛び交っていた。見た目は自分も中国人と変わらないので、ほとんど違和感なく溶け込んでいたのではないだろうか。

さて調髪であるが、バリカンとカミソリをベースとして時々ハサミを使う、という感じの極めていい加減なスタイルで、あっという間に終了した。散髪料はとつともなく安く、当時の日本円で500円くらいだったと記憶している。この異国の地での床屋体験は、とても地味ではあったが、自分にはとても新鮮な経験であった。一般にはレストランや食堂での飲食や買い物くらいしか実際に外国人との触れあいがいないような海外旅行において、たとえ言葉が通じなくても、一切会話をしなくても、短時間ながら何か異国の文化にも触れ



現在のサンフランシスコのチャイナタウン（写真は本文と直接関係ありません）

たような不思議な気分になれる時間、空間であった。これが、その後海外に行くたびに床屋に行くようになったきっかけになった。

## 日本での床屋事情

このとき1990年。今振り返れば、この頃の日本はバブル時代がそろそろ終焉を迎えようかとしている時代で、当時の少々おしゃれに気遣う若い男性が髪をカットしに行く場所として、男性専科の理髪店いわゆる床屋ではなく、ヘアサロンいわゆる美容室に行くことが当たり前の頃であった。

美容室……当時から今まで自分とは無縁の場所である。おしゃれにはまったく無頓着の貧乏学生であった自分にとって、嗜好きで女性週刊誌を嘗めるように読んでいるおばちゃん、いかにも高慢ちきの嫌みな年配女性がパーマの機械の下で長時間居座っているような下町系美容室、あ

るいは、髪型はもちろん、服装や身なりに対する意識が極めて高い、美人だけど近寄り難い比較的若めの女性が占拠しているようなおしゃれ系美容室、そんな美容室などに足を踏み入れることなどできるはずもなかった。

また当時は、デフレ長引く現在の街中に蔓延している1,000円床屋……当時こんな便利な店があったなら……そんなリーズナブルで羨ましい店は存在しなかった。

美容室に行く勇気もない、冴えない男子が行くことができるのは、子供と老人御用達の理容室——床屋だったのである。

通常、多くの人は行きつけの床屋があり、店の主人と客とがたわいもない話をだだらするのが習わしであった。そんな常連客風の立ち居振る舞いも苦手な自分は、床屋では無言で過ごすか寝落ちてしまうか、あるいは寝たふりをしてひたすら時間が経過するのを待っているのである。また、新しいもの好きの傾向も強い。こういう性格ゆえ、行きつけの床屋というものを持たずに今まで生きてきた。元来、髪型に拘りはなく、どんな髪型であってもこの顔ではどうしようもないでしょ、という諦めの気持ちが支配している。それゆえ、先月はこの街の、今月はあの街のといった感じで、日本においてもさすらいの床屋探しをしていたの

である。こういう背景があったので、異国の地で床屋に足を踏み入れることにあまり抵抗を感じなかったのかもしれない。

## 世界各国の床屋事情

24歳の、はじめての海外旅行におけるサンフランシスコ・チャイナタウンでの床屋体験に味を占めて、その後海外に行くたびに可能な限り床屋に行くようになった。特に海外学会や会議での空いた時間に、雰囲気のある床屋を見つけては足を運ぶことをルーティンワークとするようになった。最近では多少英語力もついて、英語圏や英語の話せる人が担当の場合には片言の会話を楽しむ、簡単にカットの仕方を説明するようにもなったし。また、日本では絶対足を踏み入れない美容室（ヘアサロン）に入ることも海外では厭わなくなった。

当然髪を切ってもらふ必要から、ある程度髪が伸びた状態で行かねばならない。最近では年間10回程度海外に行く機会があるので、日本での散髪を極力控えるようにしている。そして、わずかな隙間時間を利用して、床屋のための時間を捻出している。学会等では何度も同じ都市に行くことがあるが、基本的に同じ床屋には入らないようにしている。今まで、床屋（ごくたまにヘアサロン）

に入ったのは、サンフランシスコ数回、シカゴ数回、ニューヨーク、オランダ、アトランタ、メキシコシティ、台北数回、ソウル2回、北京、広州、香港、バンコク、シンガポール、ホーチミン・シティ、ロンドン、パリ、ウィーン、ベルリン、マドリッド、ブダペスト、プラハ、アムステルダム、ストックホルム、といった都市である。

以下、幾つか記憶に深く刻まれている床屋をそれぞれ簡潔に紹介する。どれも忘れ難い強烈な印象が残っているのだが、如何せん写真を撮っていないのが残念である。



米国アラバマの床屋（写真は本文と直接関係ありません）

### ① マドリッドの情熱の床屋

とにかく床屋の主人が特徴的であった。全身から汗を吹き出しながら（何度顔にかかったことか）巻き舌のスペイン語で独り言のように一方的にしゃべりながら散髪をしてもらった。ラテンの熱い血を身を持って感じられた。

### ② ブダペストの超美人美容師

旧東欧の国々には美しい魅力ある街が多いが、床屋、ヘアサロンもお勧めの場所が多い。ドナウの真珠と謳われるハンガリーの首都ブダペストではヘアサロンに入った。そこで担当になった美容師が、モデルのような体形の絶世の美女であった。日本では床屋の座席に座った途端、パプロフの犬の如くすぐに寝落ちする自分であるが、ここでは完全覚醒でずっと顔を眺めていた。あれほどの美人に今までお目にかかったことはない。

### ③ 北京の怪しい床屋

2000年に学会で北京を訪れた。当時の北京は今のよう近代的な大都市ではなく、人民服を着た人が街のあちこちで見受けられ、壊れそうな自転車に乗っている人も多い、一昔も二昔も前の中国の姿であった。何処に行ってもぶらぶら歩くことが好きで、国内外問わず生活臭の強い路地とかを彷徨い歩くのが自分にとって至福の時である。北京でもいつも通り、中心街を外れて路地裏を散策していると、何となく艶めかしい感じのサインボールが目にとまった。一見して床屋であったが、中では少し化粧の濃い綺麗なお姉さんが手招きしていた。直観で怪しいと感じたものの、海外での散髪を信条としている自分としてはトライせずにはい



中国・広州での散髪風景（筆者が洗髪してもらっている）

られない状況であった。誘蛾灯に寄ってくる蛾の如く吸い込まれていくと、そこは何とも、床屋とは名ばかりの裏風俗のような佇まいであった。そこでどうなったか。ここでは記載を割愛させていただく。

今回、自分の海外床屋体験のごく一部を紹介させていただいた。写真を撮っていればもっと詳しい状況や魅力を理解していただけたと思うのが、とても残念である。これからも海外に行く機会には時間を見つけてなるべく床屋に足を運び、また別の機会にでもその魅力を伝えたいと思う。